１　研究開発課題

多様な個性や特性、背景を有する子供達を包摂する柔軟な教育課程の編成
〈一人一人の興味・関心に応じた学びの充実のための弾力的な教育課程編成〉

学校教育法施行規則の規定によらず、１単位時間を変更して生み出された時間を用いて、児童生徒の興味･関心や学習上の課題等に応じて柔軟に学びを選択できる時間の設定をしたり、教師の研修や授業改善のための時間に充てたりするなどして、児童生徒一人一人の興味･関心に応じた学びの充実のための弾力的な教育課程の編成・実施の在り方について研究開発を行う。

２　研究の概要

本研究は、糸島市立志摩中学校（姫島分校を含む。）及び校区内の４小学校（桜野小学校、可也小学校、引津小学校、姫島小学校）で構成される志摩中学校区で行う。

まず、「研究内容Ⅰ」として、各学校において、学校教育法施行規則第 51 条（別表第１・第２）に示されている１単位時間の授業時間数（小学校 45 分、中学校 50 分）をそれぞれ５分短縮し、総授業時数及び各教科等の時数が標準時間時数を下回る教育課程の特例を適用する。そこで生み出された１日約 30 分、年間約 100 時間（以下「裁量的な時間」という。）を用いて、各学校や地域の実態及びその特色を生かし、児童生徒の主体性を育む探究的な教育課程内の教育活動並びに教職員の価値創造性と指導力の向上を図る教育課程外の取組を行う。その際、校区で行う研究であることに加え糸島市では従来から小中連携を重視して校区事業を実施していることから、裁量的な時間で行う取組の企画・運営を行う際の、共通した方向性として「指針」を設定する。

次に、「研究内容Ⅱ」として、各教科等の授業の在り方を究明する。短縮された小学校 40 分、中学校 45 分の授業における、各教科等の特質に応じた指導や支援の在り方並びに学習指導要領に示された各教科等の目標や内容について、効果・効率の向上及び確実な定着に必要なカリキュラム・マネジメントの検討を、授業研究及び実践により検討する。

研究を進めるに当たっては、志摩中学校区の各小・中学校で一貫した「目指す児童生徒像」を小中の接続、児童の実態や発達段階、各学校や地域の特長、学校規模などから整理し、研究内容Ⅰ及びⅡを通して、志摩中学校区での共通認識に基づき教育実践を行うようにするとともに、裁量的な時間を含む各教科等の教育課程上の役割、内容及び必要授業時数等を明確にする。

３　研究の目的と仮説等

（１）研究の目的

これからの社会においては、生成 AI の加速度的発展や変容する世界情勢など、非連続的な変化が予想され、未来を生きる人間に求められる資質・能力や、人間が学ぶことの意味について、社会の関心が高まっている。

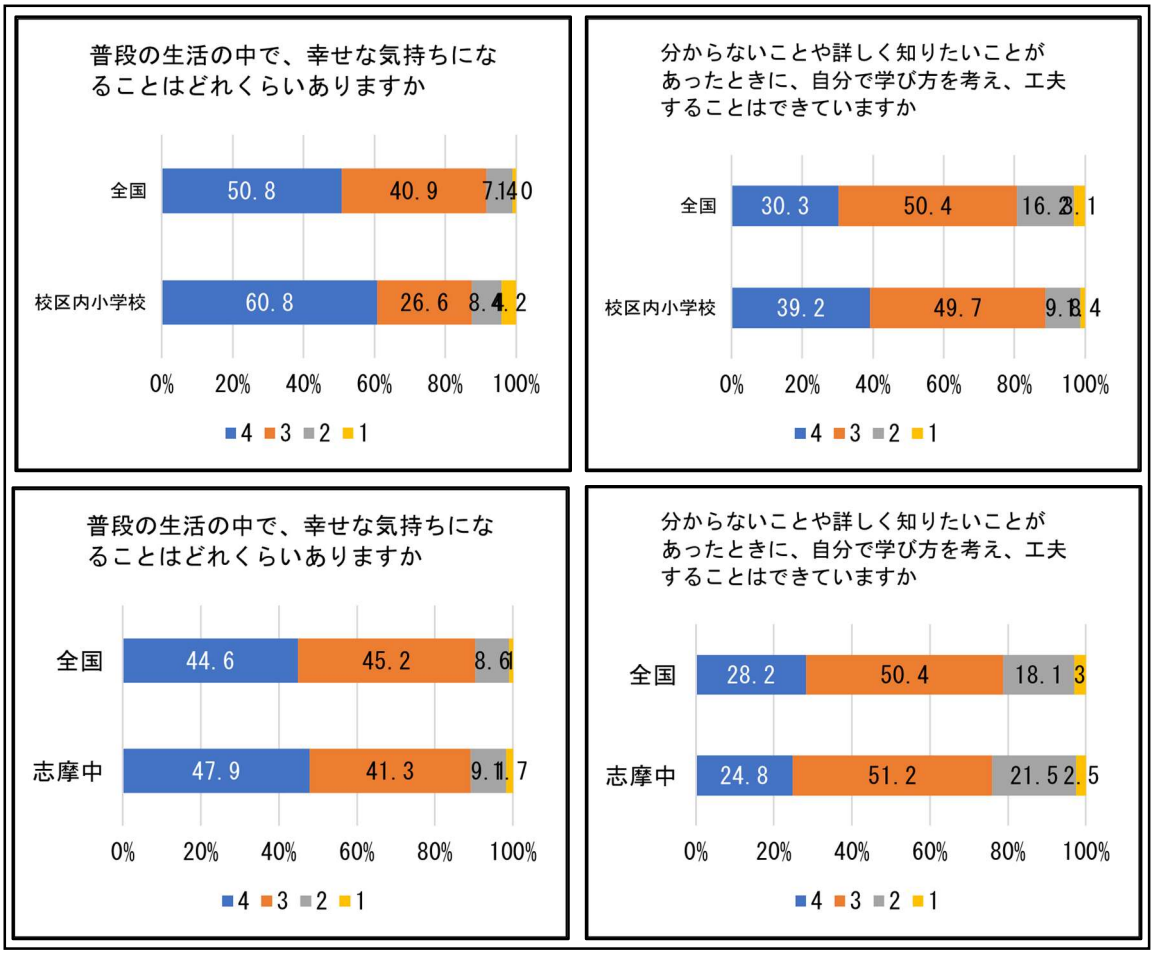
そのような社会を生きる児童生徒に対し、今後の学校教育では、現実社会に存在又は内在している諸問題から物事の成り立ちや本質を見極めた上で自ら問いを発したり、見通しをもって自ら設定した課題について、多様な他者と協働しながら、幅広い視座や視点から解決に対して粘り強く取り組んだり、自らの学びのプロセスや学習方略、課題解決の手法等を振り返りながら調整を図ったりすること等を通して「思考力、判断力、表現力等の総合的な理解」や、各教科等の特質に応じた「知識及び技能に関する統合的な理解」など、「高次の資質・能力」を獲得していく質の高い教育活動が必要である。また、そのような児童生徒一人一人の主体的・対話的で深い学びの

実装を実現するためには、それを適切に支援したり、学びをデザインしたりする教師の価値創造性と指導力の向上が欠かせない。

以上の考え方は、教育課程企画特別部会「論点整理」（令和７年９月 25 日文部科学省）の「次期学習指導要領に向けた基本的な考え方」で示されている「自らの人生を舵取りする力と民主的で持続可能な社会の創り手育成」に直結するものと考えている。

各学校の実態については、研究介入前である「令和６年度全国学力・学習状況調査」の児童生徒質問紙調査から２項目の結果を基に分析した。志摩中校区各学校では「普段の生活の中で、幸せな気持ちになることはどれくらいありますか」という「日本社会に根差したウェルビーイング」に関係すると思われる質問に対し、「よくある」と答えた児童生徒の割合が全国平均よりも高い結果となっている。その一方で、「あまりない」「全くない」と答えた児童生徒の割合が全国平均よりも高いという課題がある。

また、**【資料１】**にあるように「主体的な学び」に関係すると考えられる「分からないことや詳しく知りたいことがあったときに、自分で学び方を考え、工夫することはできていますか」という質問に対しては、中学校では「４　よくある」「３　ときどきある」と答えた生徒の割合が全国平均よりも低い結果となっている。このことから、特に中学校においては、家庭や地域、学校における生活において幸福を実感している児童生徒が多い一方で、学びに対する疑問や知的好奇心の高まりがあっても、具体的な学習行動に移したり学ぶ方法を自分で考えたりすることに消極的な傾向がみられた。



【資料１】令和６年度全国学力・学習状況調査児童生徒質問紙「主体的な学び」に関係すると考えられる４項目

そのため、本研究では、糸島市立志摩中学校区の小・中学校の児童生徒及び教職員を対象として、第４期教育振興基本計画において総括的な基本方針・コンセプトとして示された「2040 年以降の社会を見据えた持続可能な社会の創り手の育成」と「日本社会に根差したウェルビーイングの向上」を実現できる「学校教育の質的向上を図る教育課程及び教育課程外の取組等の在り方」を究明することを目的として研究に取り組む。

以上により、研究の最終目標（成果指標）を児童生徒と教師のウェルビーイングの向上と設定している。教師のウェルビーイングの向上は、児童生徒の主体的・対話的で深い学びの実装の基盤と考えている。

本研究では、九州大学教育学部との連携により、児童生徒の「自尊感情」「協調的幸福感」「学校適応感」、教師の「自尊感情」「協調的幸福感」「学校組織の風土」を測定する尺度を用い、糸島市独自の評定尺度の開発・運用を行う。

（２）研究仮説

糸島市立志摩中学校区の小・中学校を対象として、１単位時間の授業時間数を５分短縮し、総授業時数及び各教科等の時数が標準時間時数を下回る教育課程の特例を適用して生み出される裁量的な時間の効果的運用及び教育課程内の授業の在り方を検討する際に、各学校の取組において、**【資料２】**に示す研究内容Ⅰ・Ⅱ及び取組の指針等に基づいた調査研究を行えば、同一校区内における小中連携に基づいた学校教育の質的向上を図ることができるであろうと考える。

研究内容Ⅰ 「志摩中校区各学校の学校や地域の実態及びその特色を生かした教育活動及び「教職員の資質・能力の向上を図る裁量的な時間の運用の在り方」	指針1 児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動	① 従来の教育課程で育成する資質・能力を基盤とし、更なる充実・発展を意図した教育活動の質的向上を図る取組
		② 自らの興味・関心や学習上の課題等に対し、児童生徒が主体的に探究的な学習活動を選択・判断できる柔軟性のある教育活動
		③ 児童生徒や学校の実態及び地域がもつ特性や教育力を最大限に生かした教育活動の工夫
		④ 児童生徒の意見を聴取したり意思決定に参画したりするなど、児童生徒の自主性や主体性を高める工夫
	指針2 自ら学び続ける教師を目指した教職員の資質・能力の向上を図る取組	① 教職員自らの強みや課題意識に基づき、教職員自らが企画・運営を行うなど、主体的に資質能力の向上に取り組むことができる柔軟な研修等の機会の設定
		② 児童生徒の教育相談や学校外の方々と教職員が協働的に取り組む活動の設定
		③ 教職員の資質・能力の向上を効果的・効率的に図るために、個人目標の設定や取組内容の決定への福岡県教員育成指標の活用
研究内容Ⅱ 「各教科等の授業時間短縮に応じた授業におけるカリキュラム・マネジメントの在り方」	① 教科等における内容を効果的・効率的に学ぶカリキュラム・マネジメント及び教科等横断的なカリキュラムのデザイン ② 授業時間短縮に応じた指導過程の最適化 ③ 知識及び技能の習得や習熟、思考力、判断力、表現力等を育成するための、効果的・効率的な支援や指導の手立ての創出 ④ 児童生徒の学びを一定のまとまりとして捉えて行う学習評価の内容や方法の整理と適正化	

【資料２】研究内容等一覧

（３）必要となる教育課程の特例

本研究では、各教科等の授業時間数を５分短縮することにより生み出された裁量的な時間（約 100 時間）を、約 50%ずつの比率で「児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動」と「自ら学び続ける教師を目指した教職員の資質・能力の向上を図る取組」を行う。

そのため、学校教育法施行規則第５１条（別表第１・第２）に示されている１単位時間の授業時間数（小学校 45 分、中学校 50 分）をそれぞれ５分短縮し、標準授業時数である小学校第１学年 850 コマ、第２学年 910 コマ、第３学年 980 コマ、小学校第４学年から中学校第３学年 1015 コマをそれぞれ小学校 40 分、中学校 45 分（状況に応じて弾力的に運用）で実施することにより創

出された、各学年の裁量的な時間約 100 時間のうち教職員の資質・能力の向上を図る取組となる約 50 時間を実施することによる、総授業時数及び各教科等の時数が標準授業時間時数を下回る教育課程を編成する。

（４）研究成果の評価方法

○　全国学力･学習状況調査等の経年変化と他の質問紙調査結果とのクロス分析

○　九州大学教育学部との連携による「自尊感情」「協働的幸福感」「学校適応感」の調査及び評価尺度の開発（年３回：７月、12 月、３月実施、児童生徒、教職員対象）

○　年２回（７月、３月）の研究に関する保護者アンケートの回答分析

○　年１回（１～３月）の学校運営協議会による学校評価の分析

※　以上の方法については、各学校で単年度ごとの分析・効果検証を行うとともに、志摩中学校区として義務教育９年間の経年推移による分析・効果検証を併せて行う。

４　研究計画等

（１）前年度までの研究開発の概要

本研究では、５分短縮により生み出された約 100 時間を大きく２つの研究に分けた。まず、研究内容Ⅰでは、各学校の児童生徒、学校、地域の実態や特色を生かした、各学校の裁量的な時間を、小中連携と校区事業という側面から共通した方向性として設定した「指針」に基づいて取組を実施している。

【研究内容Ⅰの指針１】児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動

各学校で実施した結果、以下のような成果と課題が明らかになった。

①　成果

○　各学校で児童生徒の主体性の育成を図る取組を実践し効果について検証することができた。

○　各学校の特色や地域等のリソースを活用した教育実践、自らの課題に応じた自己選択・自己決定の場面が多く設定された教育実践を多数創出することができた。

②　課題

○　児童生徒の課題意識に応じた自主的な学習や児童生徒自らの興味関心に応じた主体的な探究活動を行うためには、志摩中学校区で目指す「現実世界に主体性に関わるために必要な資質・能力」を明確にし、児童生徒や各学校の実態に応じた、資質・能力に関する義務教育９か年を通した発達段階を整理する必要がある。

○　児童生徒の主体的な探究活動への支援として、生徒と教師がともに正解が一つではない学習課題に協働的に考えるという「伴走型支援のモデル教師像」を設定し、志摩中学校区内で共通理解を図る必要がある。

③　小・中学校の取組の概要と今後の方向性

【志摩中学校】

取組名	取組の概要及び今後の方向性
ジブン学： S(Student)「ジブン深掘りタイム」	○糸島や志摩地区の産業・人材を活用した探究的企業体験活動や大学と連携した探究的研究者体験活動を通し、生徒のチャレンジ精神や探究心等に加え、判断力や実行力、コミュニケーション能力等の育成を目指す。

	○次年度の本格的実施に向けた教職員の協議や研修を実施する。 ○生徒の興味関心をもとにグルーピングを行い、興味関心や探究テーマが近い生徒同士でゼミを設置する。 ○各ゼミには、教師の興味関心も考慮し、生徒の興味関心と可能な限り一致するように教師を担当チューターとして配置する。 ○他者に意見をもらうための報告書を作成したり、発表会を行ったりする方向性を検討した。 ○次年度に向け、生徒の主体的な探究活動への伴走型支援の実現として、生徒と教師が答えのないことを一緒に考えるという「教師のモデル像」を設定し共有する必要がある。
ジブン学： S(Student)「ジブン育成タイム」	○全教職員が自身の担当教科に応じて、生徒のスキル向上につながる講座を開設した。 〈開設講座例〉英語検定、数学検定、持久走、裁判員裁判、 English Café　等 ○生徒自身の興味関心や課題に応じて、「やってみたい」「もっと知りたい」という気持ちを大切に、講座選択を行うことを重視した。 ○生徒が自身の課題（教科学習やソーシャルスキル等）を自覚し、その課題に応じて学習やスキルトレーニングを選択し、各自の課題解決を目指す。 ○ジブン育成タイムで取り組んだことがジブン深掘りタイムにつながる可能性があるため、次年度に向け、２つの取組の役割や関係性を整理する。
ジブン学： S(Student)「縦割りの生徒会活動」	○生徒が企画を立案したり、実行委員を選考したりするなど、生徒自身による参加者全員が楽しむことを目的としたイベントの企画運営を行った。 ○生徒の自治的な取組であるため「One School プロジェクト」に名称を変更し、その趣旨を明確化する。 ○次年度以降の教育課程内の位置付けにおいて整理が必要。
ジブン学： S(Student)「オトナとお話 Week」	○学級担任や学年教師に限らず、その他の教職員や学校外から話をしてみたい人を自ら探し出して対話活動を行うことで、自分と向き合い自分の人生や生き方について考えるキャリア教育の一環とする。 ○１１月及び２月に実施し、生徒が話してみたい大人を全教職員の中から選択できるようにすることで、授業を受けたことがない先生と話をしたり、話したい先生と日常の学校生活や進路などのことについて気軽に話したりすることができた。生徒自身が話す相手を選んだことで、自己開示のハードルが低くなり、自分の人生について本音で語る場面が見られた。

【小学校】

取組名	取組の概要及び今後の方向性
〈桜野小学校〉 「パワーアップタイム」	○取り組む内容や方法を児童が選択・設定し、児童自身が自分の力を伸ばす活動を行う。 ○児童の成果（下学年の標準学力テスト）から見える課題を個人で見付け、個々の課題を設定し、課題解決に向けて、AI ドリルを活用しながら、課題を解決することができた。 ○「一人一枚合格証獲得」を目標に掲げ、活動を研究開発と連動することで、学校全体で取り組むことができた。 ○一斉授業では気付きにくい児童のつまずきを把握しやすく、日常の授業における学習支援に生かすことができた。 ○本年度の課題として、児童の主体性が発揮されにくい面があり学習の基礎基本の習得や応用力の向上など学力向上の側面が強い活動であった。次年度は、「主体性」と「探究的な」を重点とした活動になるよう、検討している。
「やるキッズタイム」	○児童主体で、児童が教師以外としてみたいことを集約・計画・実行する時間として設定する。 ○やってみたいことをどうすれば実現できるか話し合い、実践→実践したことをもとにした話合い→次の週に再実践という話合い活動のプロセスを重視した活動。話合いの場には、教師以外の人材を積極的に活用した。 ○学級・近接学年裁量の期間と学校全体・児童会裁量の期間を設定し、学級と学校全体・児童会が連携して実行し探究的な活動につながる経験や体験を積み上げることができた。 ○委員会活動や学級提案が活動につながり、児童の主体性はもちろん、役割意識や達成感を高める機会となった。学級内においても縦割りでの活動を通して、対話・協働・思いやりといった非認知的能力が育まれた。 ○本年度は「わくわくする」「楽しい」と感じることができるよう教師主導で取組を企画することが多かったため、次年度は、より児童主体への活動となるよう移行していく。その際、教師の関わり方（児童の支え方・児童への任せ方）について、教師の共通理解を深める必要がある。 ○主体的に動ける児童ばかりではないため、より個別的かつ段階的な支援の必要性が明らかになった。
〈引津小学校〉 「つみあげタイム」	○児童の主体性を引き出す工夫として、以下の３点を設定した。 ・テーマの多様性 方言、睡眠、おもちゃの仕組みなど、生活に根ざした問いの設定 ・学習形態 個人追究、異年齢交流、グループによる協働など最適な集団形態を児童が選択 ・学びのアウトプット

	紙、動画、タブレットなど、自身の強みや表現したい内容に合わせた手法を児童が選択 ○「５年生の記録を超えたい」「自分で進められるのが楽しい」といった、内発的動機の高まりよる目的意識を持った意欲的な発言が増加した。 ○自分で計画を立て、試行錯誤しながらまとめ上げる「学びプロセス」を重視することで、多くの児童が学習の進め方を体得できた。 ○成果物の出来栄えだけでなく、テーマ選定からまとめに至るまでの試行錯誤のプロセスを適切に評価する手法を確立する必要がある。

【研究内容Ⅰの指針２】自ら学び続ける教師を目指した教職員の資質・能力の向上を図る取組

各学校で実施した結果、以下のような成果と課題が明らかになった。

① 成果

○ 教職員の主体性を重視した研修や教材研究、体験活動等を実施することで、教師一人一人の個別の課題に応じた知識やスキルの向上とともに、教職員集団としての一体感や同僚性の向上が見られた（効果は今後検証予定）。

○ 研修や教材研究の時間を確保することは、教職員のより良い授業を目指そうとする物理的・心理的なゆとりを生み出すことができ、教育の質的向上に資する可能性が高い（効果は今後検証予定）。

② 課題

○ 個人目標設定（見通し）→実践→振り返り（リフレクション）のプロセスをより計画的に行う必要がある。特に、研修効果を高め確実な資質・能力の向上に資する取組とするための体制づくりと管理職の支援が必要である。

③ 小・中学校の取組の概要と今後の方向性

【志摩中学校】

取組名	取組の概要及び今後の方向性
ジブン学：T(Teacher)「ジブン育成タイム」	○教師が自身の課題（教科指導や学級経営、保護者対応等）を自覚し、その課題に応じて職員間でグループを作り、課題に応じて学習やスキルトレーニング、オンデマンド研修等を選択し、各自の課題解決を目指す。 ○社会科、外国語科の教員を対象に、福岡教育大学や九州大学より講師を招き、授業づくりの基本についての講話や指導案検討、授業参観・助言などを行うことで、学習指導要領に求められている資質・能力を高める授業づくりにつながっている。 ○次年度以降、教員としての資質・能力を高めるためだけでなく、社会人としての教養を高めるために研修を開催する。
ジブン学：T(Teacher)「ジブン深掘りタイム」	○教師自身が学びを楽しんだり、じっくり取り組んだりすることができる時間を確保し、授業計画や授業内容

	等を考え、実践する。 ○ノー部活動デイと連動させることで、教材研究に係る担当者の打合せや授業準備が充実した。 ○次年度は、福岡県教員育成指標の活用充実を図り、教師一人一人のキャリア発達の目標設定を更に明確化する。 ○個人目標の達成に係るリフレクションの時間を適宜設定するなど、確実な資質・能力の向上に資する取組とするための体制づくりと管理職の支援が必要である。

【小学校】

取組名	取組の概要及び今後の方向性
〈可也小学校〉 「学び合いの場」	○教師が自分の得意分野についてのミニ講話を職員に向けて行い、全員で学びを共有する。 ○教師の得意分野によるミニ講話や授業で活用する教具を体験したり、児童が行うスポーツを実際に体験したりすることによる指導力の向上と同僚性が構築できた。 ○５分短縮授業を成立させるための綿密な教材研究を含め、校内研修の枠を超えた多様な学びにより、教職員の知識の幅が拡大し、相互理解が深まった。
「児童の情報共有」	○児童の生活や学習の様子を職員間で共有し、支援方法について検討する。 ○児童の生活や学習の様子を職員間で共有する時間を確保することにより、児童一人一人に対する組織的な支援を綿密に検討することができた。 ○次年度に向けて、教職員の経験年数や指導力量に応じて研修や相談の形態（一斉・小集団・ペア等）を柔軟に工夫する必要がある。
〈桜野小学校〉 「ゴールデンタイム」	○教職員の自己研鑽や教材研究、４０ 分授業のための研修（ICT の利活用や基礎学力の定着のための有効な手段等）や若年教員に対する「先輩教員お悩み相談室」を開催する。 ○教師一人一人の主体性を重視し、児童が行う学習活動や校外活動を体験することで、児童がどのような場面で意欲を高めたり困難さを感じたりするのかといった、学習支援の具体化に必要なイメージをもつことができた。 ○教職員同士が、学年や学級を越えて共通の学びや体験ができたことで、職員の一体感が生まれ、同僚性の高

	まりがみられた。 ○教師が全員一斉で研修する時間や教師個人で研修する時間の配分設定、個人目標設定→実践→振り返りのプロセスをより計画的に行い研修効果を高める必要がある。

【研究内容Ⅱ】各教科等の授業時間短縮に応じた授業におけるカリキュラム・マネジメントの在り方

研究内容Ⅱでは、短縮された小学校 40 分、中学校 45 分の授業における指導や支援の在り方を、授業実践により検討し、以下のような成果と課題が明らかになった。

① 成果

○ 各学校の校内研修（主題研究）において、一単位時間の指導の在り方とともに、学びをひとまとまりとして捉えた単元等の指導過程及び支援の在り方を研究し、授業モデルを提案・検討することができた。

○ ５分短縮授業の実施により、学習のテンポがよくなったり、これまでより児童生徒の授業に対する集中力が高まったりしたという教師の実感がある。糸島市独自の評定尺度調査においては、特に小学校低学年と高学年において、授業中の成功体験や安心感、心理的負担感の軽減についてよい結果が出ている。

② 課題

○ 各教科等の本質（何のために、何を、どのように学ぶのか）について、「知識及び技能に関する統合的な理解」及び「思考力、判断力、表現力等の総合的な理解」を整理し、「高次の資質・能力」の育成に必要な年間授業時数及び年間指導計画を見直し、効果・効率を重視したカリキュラム・マネジメントの検討が不可欠である。

○ 糸島市独自の評定尺度調査においては、学習内容が高度化する小学校中学年において、より丁寧な支援や心理的負担感の軽減が必要と指摘されている。

※ なお、生徒に実施した授業評価アンケートによる分析は、令和８年度末の研究開発報告書において実施予定である。

③ 小・中学校の取組の概要と今後の方向性

【志摩中学校】

○校内主題研究と連携して実施し、研究部主催の研究授業及び協議会を適宜実施し、45 分授業の基本的な授業スタイルの提案（例：外国語科）や授業の効果的な進め方について共通理解を図った。

○基礎学力の定着を図る帯学習を継続して取り組むことで、学力向上につながった。

○これまで１コマ 50 分で行っていた学習内容を 45 分２コマで行うなど、生徒が思考・判断・表現する時間や交流する時間を増やすことで、各教科等の中核的概念への深い理解に関わる「知識及び技能に関する統合的な理解」や、複雑な課題の解決に関わる「思考力、判断力、表現力等の総合的な理解」など、「高次の資質・能力」を獲得していく授業へ転換していく。

○週当たりの必要かつ適正な時数を提案できるように、各教科等の年間指導計画を見直し、教科、道徳、総合的な学習の時間、特別活動などの内容及び活動を精査し、教育的な効果・効率を重視したカリキュラム・マネジメントを検討する必要がある。

【小学校】

〈姫島小学校〉

○指導過程の最適化により 40 分授業における個別最適化された学びの創造するために、研究推進を以下の３グループで行った。

・グループ①：主体的・探究的な学習を促す指導法

・グループ②：言語力・表現力の育成に焦点を当てた指導

・グループ③：協働的・対人的な学びの環境づくり

○指導過程の最適化（導入・まとめの効率化）を図ることで、児童生徒が自走する「個別最適な学び」の時間を確保できた。

○次年度に向けて、教科等横断的な視点や午前５時間制の検討による、密度の高いカリキュラム・マネジメントを検討する必要がある。

〈可也小学校〉

○指導過程の最適化を図るために、教科等横断的な題材を扱ったり、ICT を活用したりしながら、以下の取組を実施することができた。

① 予習を取り入れた授業

・家庭と連携した予習や振り返り活動の工夫を入れた授業づくりの実施

・学習内容について家庭で話し合い、児童の学習意欲や思考を深める。

② 先行研究校の授業から

・指導内容の厳選・重点化を図りながら、授業デザインの研究を進めた。

○40 分という短時間でより学習効果を高めるために、指導過程の最適化とともに各教科等の指導内容の厳選・重点化を検討する必要がある。

【令和７年度研究開発学校プロジェクト予備調査分析報告より】

九州大学教育学部との連携により、児童生徒の「自尊感情」「協調的幸福感」「学校適応感」、教師の「自尊感情」「協調的幸福感」「学校組織の風土」を測定する糸島市独自の評定尺度の開発・運用を行った。令和６年度の予備調査及び令和７年度６月に行った本調査の結果から以下のような分析結果の報告を受けている。

■調査対象：志摩中学校区の小学校４校、中学校１校の児童生徒及び教職員（実験群）
志摩中学校区以外の小学校、中学校それぞれ１校の児童生徒及び教職員（統制群）

■尺度の信頼性：小学校、中学校及び教職員いずれの尺度についても高い安定性が確認された。

■分析結果

小学校低学年：志摩中学校区の小学校で「自尊感情」「協調的幸福感」「学校適応感」が有意に高い傾向が見られた。

小学校中学年：志摩中学校区以外の小学校で「学校適応感」が高い傾向が見られた。

小学校高学年：志摩中学校区の小学校で「否定的自尊感情」が有意に低い傾向が見られた。

中学校　　：全ての項目において、現段階での有意な差は見られない。

教職員　　：「自尊感情」「学校組織の風土」に大きな差はなく否定的な影響は見られない。
志摩中学校区で「協調的幸福感」が有意に高い傾向が見られた。

■結論と次年度への展望

・令和７年度 11 月及び３月の調査結果の分析と報告

・小学校中学年への支援の充実を検討する必要がある。
・本評定尺度による調査を継続するとともに学力調査等との相関分析を行う。

（２）当該年度の教育課程の内容

① 志摩中学校区研究推進の推進計画

本研究を推進するに当たり、具体的には、以下のとおり研究推進を行う。

・研究開発推進委員会（随時開催）を設置し、志摩中学校区で研究推進方針の決定や大幅な変更や新たな研究内容等の周知徹底が必要な場合等に開催する。糸島市教育委員会及び運営指導委員会の指導助言に基づきながら、志摩中学校区各学校の校長、代表教頭及び研究開発担当者が研究推進の方向性を協議し、推進方針や研究組織の変更、効果検証後の改善の方向性等を決定する。
・研究開発担当者及び各学校の教務担当者で構成された「開発担当部会（随時開催）」を設置し、研究内容Ⅰについての研究推進を組織的・計画的に行う。
・研究開発担当者及び各学校の校内研修担当者（研究主任）で構成された「研究担当部会（随時開催）」を設置し、研究内容Ⅱについて、各学校の研究推進委員会や校内研修（主題研究）の研究推進を組織的・計画的に行う。

なお、研究内容Ⅰ・Ⅱともに研究指定期間を問わず、小中連携の強化を図るため各学校の効果検証にとどまらず小中９か年を見通した経年推移を中心に効果検証を行う。

・本年度、志摩中学校区内で発足させた「生徒指導交流会」において、児童生徒のウェルビーイング向上に必要な児童生徒同士の人間関係や児童生徒と教師のよりよい人間関係構築を図るため、発達支持的生徒指導の視点による集団づくりについて、中学校区共通の取組を検討する。
・「糸島市における「教育指導計画作成」に係る留意点」を提示し、裁量的な時間における「児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動」並びに「教職員の価値創造性と指導力の向上を図る教育課程外の取組」の質的管理及び量的管理、５分短縮授業内容に係る研究内容が把握し共有できる「研究開発学校全体計画」を作成する。

② 研究推進の内容

ア 志摩中学校区で育成を目指す児童生徒像の検討・整理**【資料３】**

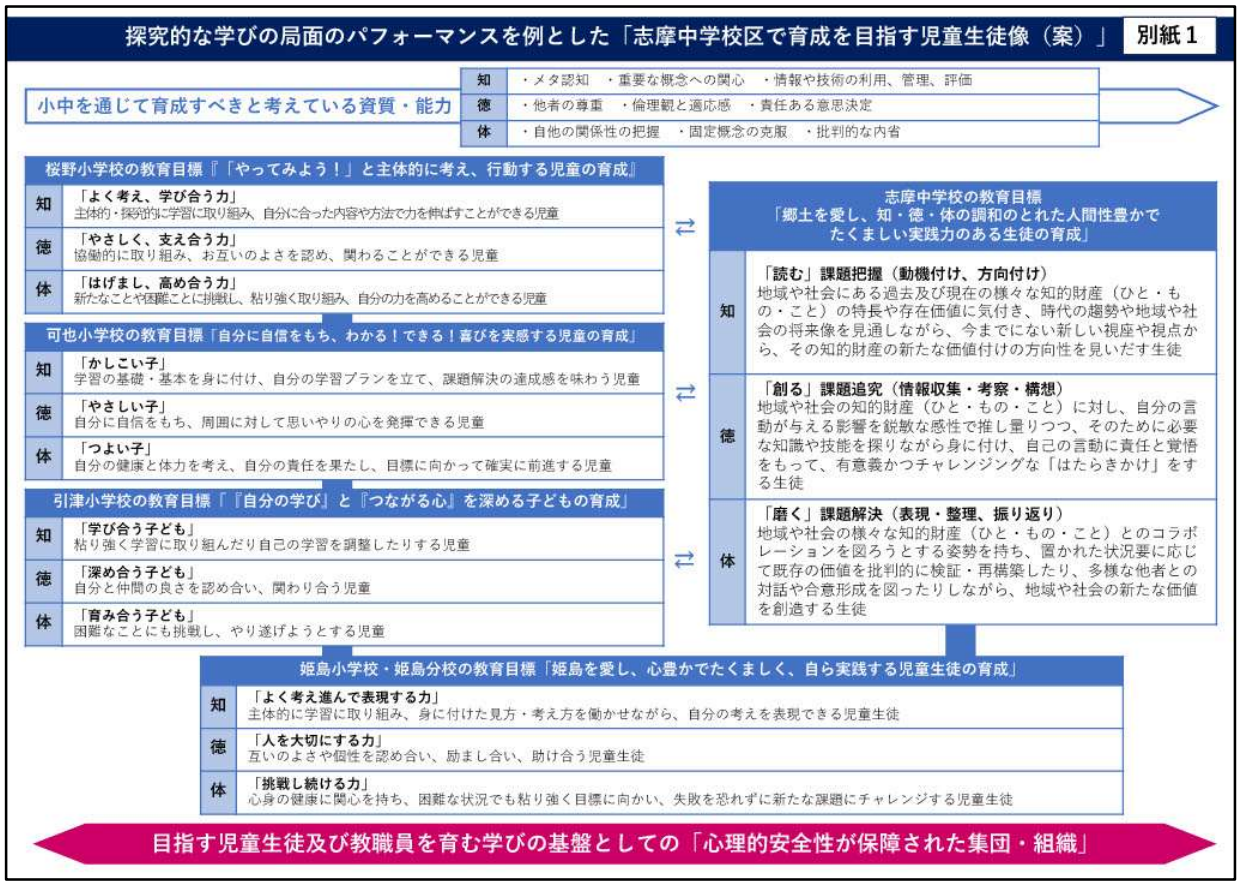
令和７年度は、教育課程の特例として生み出された裁量的な時間を用いた研究内容Ⅰとして、「児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動」と「教職員の価値創造性と指導力の向上を図る教育課程外の取組」を実施した。また、研究内容Ⅱとして、５分短縮による小中学校の授業における、各教科等の特質に応じた指導や支援の在り方を研究してきた。

令和８年度は、研究内容Ⅰにおいて、裁量的な時間で行う「児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動」の内容や方法、配当時間数等の年間計画を明確化し提案していく。

さらに、研究内容Ⅱにおいて、５分短縮授業における各教科等指導の特質に応じた指導や支援の在り方を提案していくとともに、令和９年度以降に向けて、学習指導要領に示された各教科等の目標や内容について、効果・効率の向上及び確実な定着に必要なカリキュラム・マネジメントの検討を授業研究及び実践により検討していく。

以上のような研究を進めるに当たっては、以下の志摩中学校区小・中学校で一貫した「育成を目指す児童生徒像」を探究的な学びの局面で整理し、研究内容Ⅰ及びⅡを通して、志摩中学

校区の共通認識に基づき教育実践を行うことができるようにする。



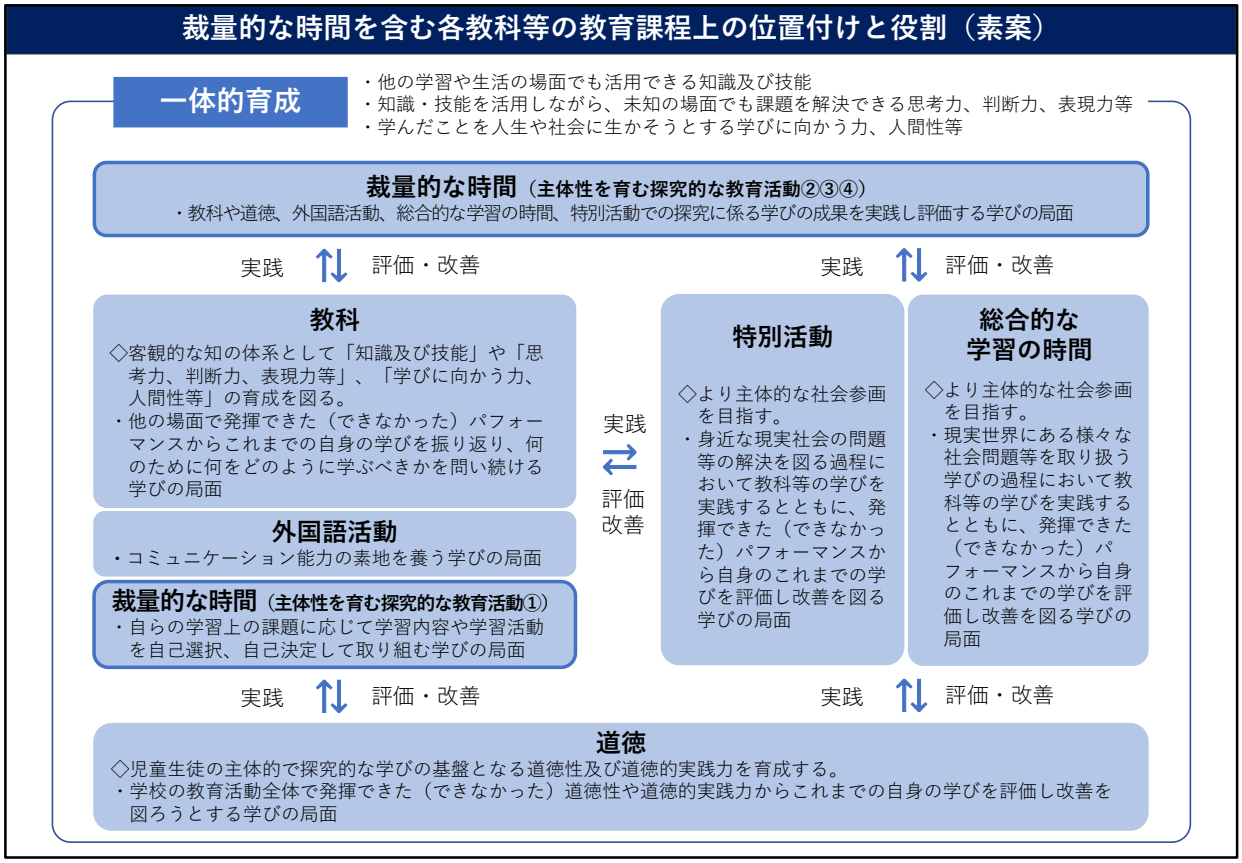
【資料３】志摩中学校区で育成を目指す児童生徒像

イ　裁量的な時間を含む各教科等の教育課程上の位置付けと役割**【資料４】**

志摩中学校区で育成を目指す児童生徒像の検討・整理とともに、裁量的な時間で行う教育課程内の教育活動について、各活動の目標や内容を明確化していく必要がある。そのためには、裁量的な時間を含んだ各教科等（教科、道徳、外国語活動、総合的な学習の時間、特別活動）の教育課程上の位置付けや役割、それぞれの関係性等を明らかにしていく必要がある。

また、教育課程上の位置付けや役割を明確化することにより、各教科等で身に付けるべき資質・能力や教科等の特質に応じた見方・考え方（思考力、判断力、表現力等の総合的な発揮）に対する教師の理解が深まるとともに、他の学習や生活の場面で活用し、未知の場面でも課題を解決している児童生徒のパフォーマンスの具体的な想定が可能となると考えている。

現段階での整理は以下の図のとおりである。



【資料４】裁量的な時間を含む各教科等の教育課程上の位置付けと役割

エ　裁量的な時間で実施する各活動の目標や内容、配当時間数等の年間計画

以下に示す令和８年度に志摩中学校区の各学校で実施する「児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動」及び「教職員の価値創造性と指導力の向上を図る教育課程外の取組」について、教育課程上の位置付けや役割に基づき、各活動の目標や内容、配当時間数等の年間計画を明確化し提案していく。

【指針１・２に基づく令和８年度志摩中学校区各学校の研究内容Ⅰの取組】

○　指針１　児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動の設定

A　従来の教育課程で育成する資質・能力を基盤とし、更なる充実・発展を意図した教育活動の質的向上を図る取組を実施すること。

B　自らの興味･関心や学習上の課題等に対し、児童生徒が主体的に探究的な学習活動を選択・判断できる柔軟性のある教育活動を仕組むこと。

C　児童生徒や学校の実態及び地域がもつ特性や教育力を最大限に生かした教育活動の工夫を行うこと。

D　取組内容等を決定する際には、児童生徒の意見を聴取したり意思決定に参画したりするなど、児童生徒の自主性や主体性を高める工夫を行うこと。

○　指針２　自ら学び続ける教師を目指した教職員の資質・能力の向上を図る取組

A　教職員自らの強みや課題意識に基づき、教職員自らが企画・運営を行うなど、主体的に資質・能力の向上に取り組むことができる柔軟な研修等の機会を設定すること。

B　教職員に必要な資質・能力には育成は児童生徒や地域との関わり合いの中で育成されるものも多いことから、児童生徒の教育相談や学校外の方々と教職員が協働的に取り組む活

動を設定すること。
C　教職員の資質・能力の向上を効果的・効率的に図るために、個人目標の設定や取組内容の決定を行う際に、福岡県教員育成指標を活用すること。

【志摩中学校】

	取組内容等	A	B	C	D
指針1	ジブン学：S(student)「ジブン深掘りタイム」 糸島や志摩地区の産業や人材を活用した探究的企業体験活動や大学と連携した探究的研究者体験活動を通し、生徒のチャレンジ精神や探究心等に加え、判断力や実行力、コミュニケーション能力等の育成を目指す。	○	○	○	
	ジブン学：S(student)「ジブン育成タイム」 生徒が自身の課題（教科や人間的側面、スキル等）を自覚し、その課題に応じて学習やスキルトレーニングを選択し、各自の課題解決を目指す。	○	○	○	
	ジブン学：S(student)「放課後ジブンタイム」 年に２回程度、期間を決め、放課後を個人の選択的活動の時間として設定し、好きなように時間を使う。部活動参加や中庭でのおしゃべり、帰宅後習い事に行くなどが考えられる。		○		○
	ジブン学：S(student)「One School プロジェクト」 ５月に行われる体育祭のブロックでの人間関係で行う学校行事やレクリエーション大会	○			○
	ジブン学：S(student)「オトナとお話し Week & Day」 担任に限らず、本人が話を聞いてほしい教職員を選んだり、学校外から話をしてみたい人を自ら探し出したりして、コミュニケーションを図り、自分の人生について考えるきっかけとする。		○	○	○
指針2	ジブン学：T(teacher)「ジブン育成タイム」 教師が自身の課題（教科指導や学級経営、保護者対応等）を自覚し、その課題に応じて職員間でグループを作り、課題に応じて学習やスキルトレーニング、オンデマンド研修等を選択し、各自の課題解決を目指す。			○	
	「ジブン深掘りタイム」 教師自身が「わくわく」したり「じっくり」取り組んだりすることが必要な時間を確保し、単元計画や授業内容等を考え、実践する。	○		○	

【桜野小学校】

	取組内容等	A	B	C	D
指針1	「やるキッズタイム」 取り組む内容や方法を児童が選択・決定し、自己実現を目指す。 ○　個人でやってみよう 児童一人一人が、自分のやってみたいこと、できるようになりたいことを実現させる時間。取組を通して生じた課題に対して、主体的に情報収集・分析等を行い解決する探究的な活動を行う。学習した内容をより定着させたい、発展的な問題にチャレンジしたいという児童の要望には、タブレットドリルを活用する。 ○　学級でやってみよう やってみたいことをどうすれば実現できるか話し合い、次に話し合ったことを実践。そして、実践したことをもとにまた話し合い、次の実践を行うなど、話し合い活動と実践を繰り返してワクワク感のある学級を目指す。 ○　全校や児童会でやってみよう 全校や縦割りグループでやってみたいことを実践。児童会や高学年児童が中心となり、企画、運営し、ワクワク感のある学校を目指す。 児童のやってみたいことに応じて、個人探究の期間、学級裁量の期間、学校全体・児童会裁量の期間を設定し、学級と学校全体・児童会が連携して取組を進める。	○	○	○	○
指針2	「ゴールデンタイム」 児童は帰宅させ、教職員は放課後の時間を自己研鑽に使う。 例）授業準備や児童が主体的に学ぶ授業のための研修、教師のための書写教室、ビブリオバトルなどスキルアップ研修を企画し実施する。	○	○	○	

【可也小学校】

	取組内容等	A	B	C	D
指針1	「可也っ子タイム（学級）」 児童が学級のレクリエーションの計画や実行を通して、児童同士のコミュニケーション能力の育成を図る。	○			○
	「可也っ子タイム（学年）」 学年ごとに、児童の疑問や興味関心をもとにした発展的な問いを探究する活動を行う。	○	○	○	
	「可也っ子屋」 放課後、九州大学のサークル協力のもと、児童の学習支援と大学生の専門分野や得意分野でのお話会を行う（児童の参加は自由）。	○	○	○	○
指針2	「教材グループ研究会」 40 分授業の単元構成や一単位時間の授業設計について、教師の悩みごとにグループで研究を行う。	○		○	
	「校内自主研究サークル（新時代）」 若年教師のスキルアップのために、それぞれの教員の得意分野や専門教科を中心に学びを広げたり、悩みの相談に乗ったりする。	○		○	

	「個人研修」 学校裁量時間を計画的に運用し、自分の専門分野の学びを深めたり、新しい学びを広げたりする。	○	○	○	

【引津小学校】

	取組内容等	A	B	C	D
指針1	「ひきつタイム」（※ヒーロータイム） ５校時、６校時後に 25～30 分間設定。主に集団づくりを行っていく。きっかけとしてスポコン広場に登録をしたり、係活動を充実させたり、ソーシャルスキルトレーニングを行ったりする。 （月・木・金で担任が実施曜日を計画的に決める）	○	○	○	
	「ひきつタイム」（※きほんタイム） ５校時、６校時後に 25～30 分間設定。主に主体的に学ぶ力と基礎・基本の習熟を図る。今年度は子どもが学習計画を立て、取組む内容を自己選択し、自分の課題に合った問題を選んで学習を進めて振り返りまで行う。（月・木・金で担任が実施曜日を計画的に決める）	○		○	
	「ひきつタイム」（※つみあげタイム） ５校時、６校時後に 25～30 分間設定。主に探究的な活動、学習を行う。自分が興味のあることについて調べたり、活動を通して追究したりする。（月・木・金で担任が実施曜日を計画的に決める）	○	○	○	○
指針2	「教職員の自己研鑽の時間」 教師は放課後の時間を活用し、40 分授業の計画やひきつタイムの準備を行ったり、研修会を実施して学びを深めたりする。また、近接の会や子どもを見つめる会など、子どもの様子を共有し合う場を設定する。 （火・水で計画的に進める）	○		○	

【姫島小学校・志摩中学校姫島分校】

	取組内容等		A	B	C	D
指針1	「ジブン学」 児童生徒が自分の強みや弱みに加え、自分が興味をもっていることを自覚し、自分が興味をもっていることに関してそれぞれが自由に学びを深めることで、自ら考え、実行し、発信する力を身に付ける。		○			○
	【小学校】 ・博士ちゃん・探究ちゃん・話し合いトレーニング・コーディネーショントレーニング・ジブン図鑑	【中学校】 ・プランニング ・マイキャリア ・学び方学習・探究・発信法				
	「ひめしま情報局」 島の行事や学校と地域の合同行事に関して、児童生徒が集団で作戦会議を行い、PDCA サイクルを活用して改善を重ねた取組について、地域の方々へ発信する。		○	○	○	
	【小学校】 ・運動会の応援練習・文化祭の演目練習・総合的な学習の時間など	【中学校】 ・運動会の応援練習・文化祭の演目練習・起業家教育・総合的な学習の時間など				

<table>
<tr><td rowspan="2"></td><td colspan="2">「つながりラーニング」
　個別学習に異年齢集団（縦割り）での教え合いの要素を融合させた。学年を越えたペアやグループで課題に取り組むことで、下級生は上級生への憧れをモチベーションにし、上級生は教える過程で知識を再構築する「教え合いによる深化」をねらう。</td><td rowspan="2">○</td><td rowspan="2">○</td><td rowspan="2">○</td><td rowspan="2">○</td></tr>
<tr><td>【小学校】
・縦割り活動・自分の弱点を克服する学習か、強みを伸ばす学習かを選択し、プリントやICTを利用した学習タイム</td><td>【中学校】
・ラーニングタイム（教科の単元を関連させた学習）・自分磨き学習（個人の過去・現在・未来をつなぐ）・縦割り活動（い学年の学習活動をつなぐ）・人材ネット学習（島内外の地域の人たちとつながる）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">指針２</td><td colspan="2">「ブラッシュアップタイム」　（小中ともに名称を変更しています）
　１つ目は、指針１の定期的なブラッシュアップ。常に対話を重ねることで、教員がゆとりをもって子どもと向き合える環境を創る。２つ目は、行事のスクラップ＆ビルドの実施。慣例を見直し、子どもに必要な活動へと再構築するために話し合う。３つ目は、ICTを活用した時間短縮スキルや授業のコツの共有。動画やチャットで各自の知恵や調べたことを分かち合い、業務と授業の質を向上させる。</td><td>○</td><td>○</td><td>○</td><td></td></tr>
<tr><td colspan="2">「わくわく・じっくり学」
　教職員自身が「わくわくする学び」や「じっくり取り組みたい学び」のために計画を立て、単元計画や授業内容、自己啓発や自己研鑽を図ることで、教職員が自ら考え、行動する姿を児童生徒に示し、成長モデルとなる。</td><td>○</td><td></td><td>○</td><td></td></tr>
</table>

オ　研究内容Ⅱの具体的な取組

令和８年度は、令和７年度の研究成果を土台としながら、学習指導要領に示された各教科等の目標や内容について、効果・効率の向上及び確実な定着に必要なカリキュラム・マネジメントの実現に向けて、以下の３点に取り組む。

○　小学校40分、中学校45分に短縮された各教科等の授業について、学校種や各教科等の特質に応じて、児童生徒の学びを一定のまとまりとして捉えて行う指導過程の適正化や学習評価の内容や方法が整理された「授業モデル」を研究中間報告会で提案する。

○　裁量的な時間を含む各教科等の教育課程上の位置付けと役割に基づき、教師は道徳や総合的な学習の時間、特別活動、裁量的な時間「児童生徒の主体性を育む探究的な教育活動」を、教科で学んだことの実践・評価の場と設定し、PDCAサイクルによる教科指導の在り方の改善を図る。具体的には、児童生徒自身が他の学習場面で発揮できた（できなかった）パフォーマンスからこれまでの自身の学びを振り返り、何のために何をどのように学ぶべきかを主体的に問い続けることができる授業の在り方を検討してく。

○　児童生徒が各教科等の学習内容を効果的・効率的に学ぶことができる適正時数検討を含めた教科等横断的なカリキュラム・デザインを検討する。

（３）全課程の修了認定の要件

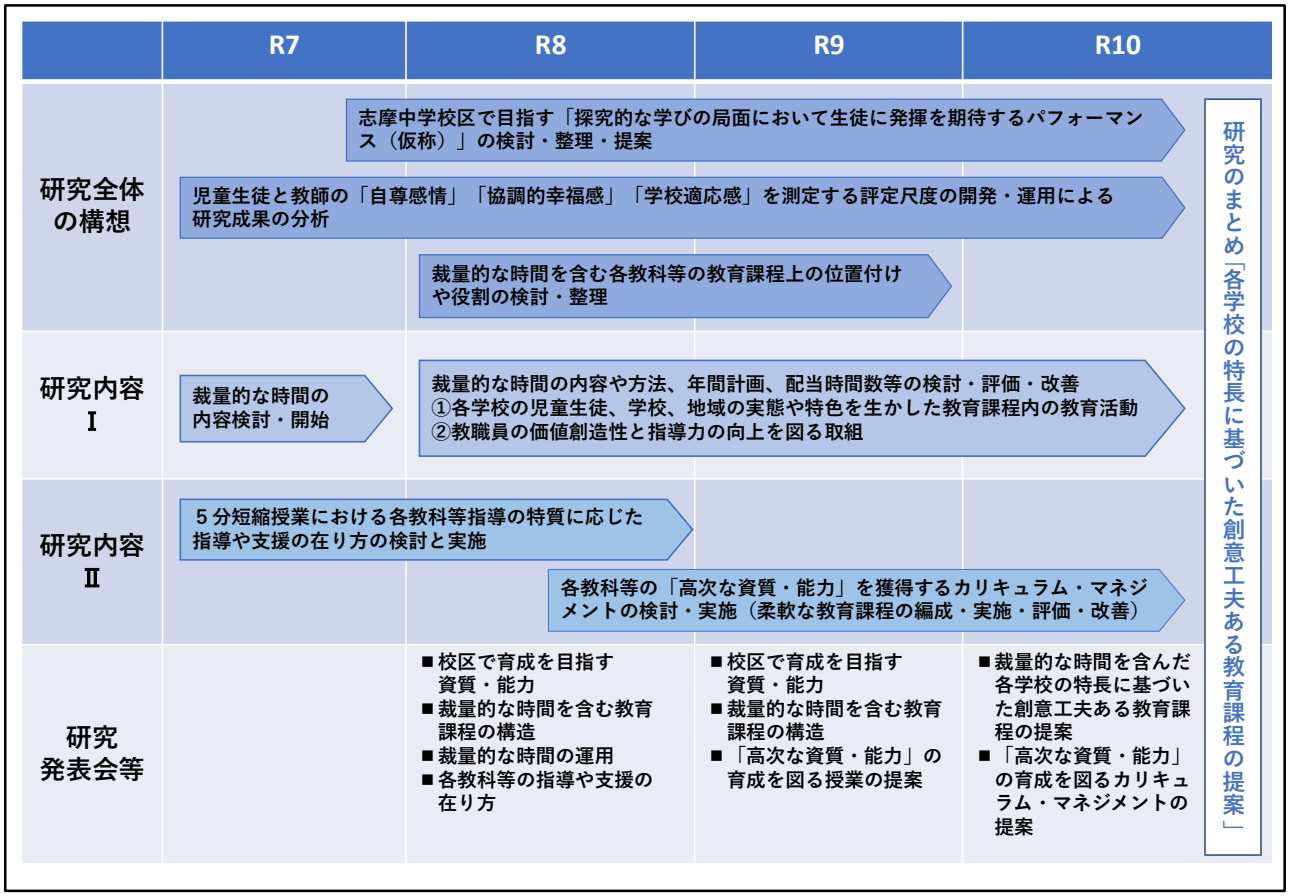
本研究では、各教科等の授業時間数を５分短縮により生み出された裁量的な時間（約 100 時間）を、約 50%ずつの比率で、「各学校の児童生徒、学校、地域の実態や特色を生かした教育課程内の教育活動」と「教職員の資質・能力の向上を図る取組」を行う。

学校教育法施行規則第 51 条（別表第１・第２）に示されている１単位時間の授業時間数（小学校 45 分、中学校 50 分）をそれぞれ５分短縮し、標準授業時数である小学校第１学年 850 コマ、第２学年 910 コマ、第３学年 980 コマ、小学校第４学年から中学校第３学年 1015 コマをそれぞれ小学校 40 分、中学校 45 分で実施することにより生み出された、各学年の裁量的な時間 5075 分のうち教職員の資質・能力の向上を図る取組を実施することにより各学年の授業時数に換算して約 2538 分（小学校は 45 分換算で約 56 コマ、中学校は 50 分換算で約 51 コマ）の減となるが、その教育課程において学習指導要領に示された内容を履修し小・中学校の全課程を修了したと認定する。

（４）志摩中学校区年次研究計画

第１年次	○　志摩中校区各学校における研究内容Ⅰ・Ⅱに係る情報収集、研究構想の構築 ・それぞれの取組指針に係る実態把握、先進地視察及び理論研究 ・開発課題に係る校内研修、教育実践 ○　効果検証及び分析について ・九州大学と連携による理論研究 ・志摩中校区合同の教育課程の編成と運用方法の研修及び交流 ・検証データの分析に係る合同研修会 ○　次年度の研究の方向性の検討
第２年次	○　志摩中学校区で目指す「探究的な学びの局面において生徒に発揮を期待するパフォーマンス（仮称）」の検討・整理・提案 ○　裁量的な時間を含む各教科等の教育課程上の位置付けや役割の検討・整理 ○　志摩中学校区各学校における研究内容Ⅰ・Ⅱについて ・先進地視察及び理論研究 ・裁量的な時間の内容や方法、年間計画、配当時間数等の検討・評価・改善 ・５分短縮授業における各教科等指導の特質に応じた指導や支援の在り方の実践と提案 ・各教科等の「高次な資質・能力」を獲得するカリキュラム・マネジメントの検討 ○　志摩中校区各学校による研究中間報告会の実施（11 月 13 日） ○　効果検証及び分析について ・児童生徒と教師の「自尊感情」「協調的幸福感」「学校適応感」を測定する評定尺度の開発・運用による研究成果の分析 ○　次年度の研究の方向性の検討
第３年次	○　志摩中校区で目指す「探究的な学びの局面において生徒に発揮を期待するパフォーマンス（仮称）」の整理・提案 ○　裁量的な時間を含む各教科等の教育課程上の位置付けや役割の整理・提案 ○　志摩中学校区各学校及における研究内容Ⅰ・Ⅱについて ・裁量的な時間の内容や方法、年間計画、配当時間数等の評価・改善 ・各教科等の「高次な資質・能力」を獲得するカリキュラム・マネジメントの検討・実施

	○　志摩中校区各学校による研究報告会の実施（10～11 月） ○　効果検証及び分析について ・児童生徒と教師の「自尊感情」「協調的幸福感」「学校適応感」を測定する評定尺度の開発・運用による研究成果の分析 ○　多様性を包摂する柔軟な教育課程学校教育の質的向上を図る教育課程及び調整授業時数制度等の実践事例集発行に向けた実行委員会の設置 ○　研究中間報告書のまとめ ・生徒、教職員、保護者の質問紙調査の経年変化による分析及び効果検証 ○　次年度の研究の方向性の検討
第４年次	○　研究最終報告会（10～11 月）による研究成果の提案 ・探究的な学びの局面において生徒に発揮を期待するパフォーマンス ・裁量的な時間の教育課程上の位置付けや役割 ・各教科等の「高次な資質・能力」を獲得するカリキュラム・マネジメント ・児童生徒と教師の「自尊感情」「協調的幸福感」「学校適応感」を測定する評定尺度による研究成果の分析 ○　多様性を包摂する柔軟な教育課程学校教育の質的向上を図る教育課程及び調整授業時数制度等の実践事例集発行 ○　研究最終報告書のまとめ ・生徒、教職員、保護者の質問紙調査の経年変化による分析及び効果検証 ・県や糸島市が主催する研修会等による研究成果の発信



【資料５】志摩中学校区の研究推進ロードマップ

（６）年次評価計画

第１年次	○　運営指導委員会と開発推進委員会（年間３回）による研究開発４か年の長・中期目標、研究構想及び各学校の実践への評価 ○　介入前、研究１年目終了時のデータ整理、分析、データ化 ・全国学力･学習状況調査等の経年変化と他の質問紙調査結果とのクロス分析 ・九州大学との連携による学校適応感、幸福感、自尊感情の児童生徒質問紙調査（年３回７月、12 月、３月） ・教師質問紙（年３回７月、12 月、３月） ・保護者アンケート（年２回７月、３月） ・学校運営協議会による学校評価（年１回１～３月）
第２年次	○　運営指導委員会と開発推進委員会（年間３回）による研究構想及び各学校の実践への評価 ○　研究１年次の課題及び活動内容の更新に基づいた検証内容の再検討 ○　介入前、研究２年目終了時のデータ整理、分析、データ化 ・全国学力･学習状況調査等の経年変化と他の質問紙調査結果とのクロス分析 ・九州大学との連携による学校適応感、協調的幸福感、自尊感情の児童生徒質問紙調査（年３回７月、12 月、３月） ・教師質問紙（年３回７月、12 月、３月） ・保護者アンケート（年２回７月、３月） ・学校運営協議会による学校評価（年１回１～３月）
第３年次	○　運営指導委員会と開発推進委員会（年間３回）による研究構想及び各学校の実践への評価 ○　研究２年次の課題及び活動内容の更新に基づいた検証内容の再検討 ○　介入前、研究３年目終了時のデータ整理、経年変化分析、データ化 ・全国学力･学習状況調査等の経年変化と他の質問紙調査結果とのクロス分析 ・九州大学との連携による学校適応感、協調的幸福感、自尊感情の児童生徒質問紙調査（年３回７月、12 月、３月） ・教師質問紙（年３回７月、12 月、３月） ・保護者アンケート（年２回７月、３月） ・学校運営協議会による学校評価（年１回１～３月）
第４年次	●　運営指導員会と開発推進委員会（年間３回）を行い、研究の総括評価及び次年度以降の取組（教育課程特例の解除後）の検討を行う。 ○　運営指導委員会と開発推進委員会（年間３回）による研究全体の総括評価 ○　研究３年次の課題及び活動内容の更新に基づいた検証内容の再検討 ○　介入前、研究終了時のデータ整理、経年変化分析、データ化 ・全国学力･学習状況調査等の経年変化と他の質問紙調査結果とのクロス分析 ・九州大学との連携による学校適応感、協調的幸福感、自尊感情の児童生徒質問紙調査（年３回７月、12 月、３月） ・教師質問紙（年３回７月、12 月、３月）　・保護者アンケート（年２回７月、３月） ・学校運営協議会による学校評価（年１回１～３月）

５　研究組織

（１）研究組織の概要

・研究開発推進委員会（随時開催）

志摩中学校区で研究推進方針の決定や大幅な変更や新たな研究内容等の周知徹底が必要な場合等に開催する。糸島市教育委員会及び運営指導委員会の指導助言に基づきながら、志摩中学校区各学校の校長、代表教頭及び研究開発担当者が研究推進の方向性を協議し、推進方針や研究組織の変更、効果検証後の改善の方向性等を決定する。

・開発担当部会（随時開催）

研究開発担当者及び各学校の教務担当者が、研究内容Ⅰについて組織的・計画的に研究開発を推進する。

・研究担当部会（随時開催）

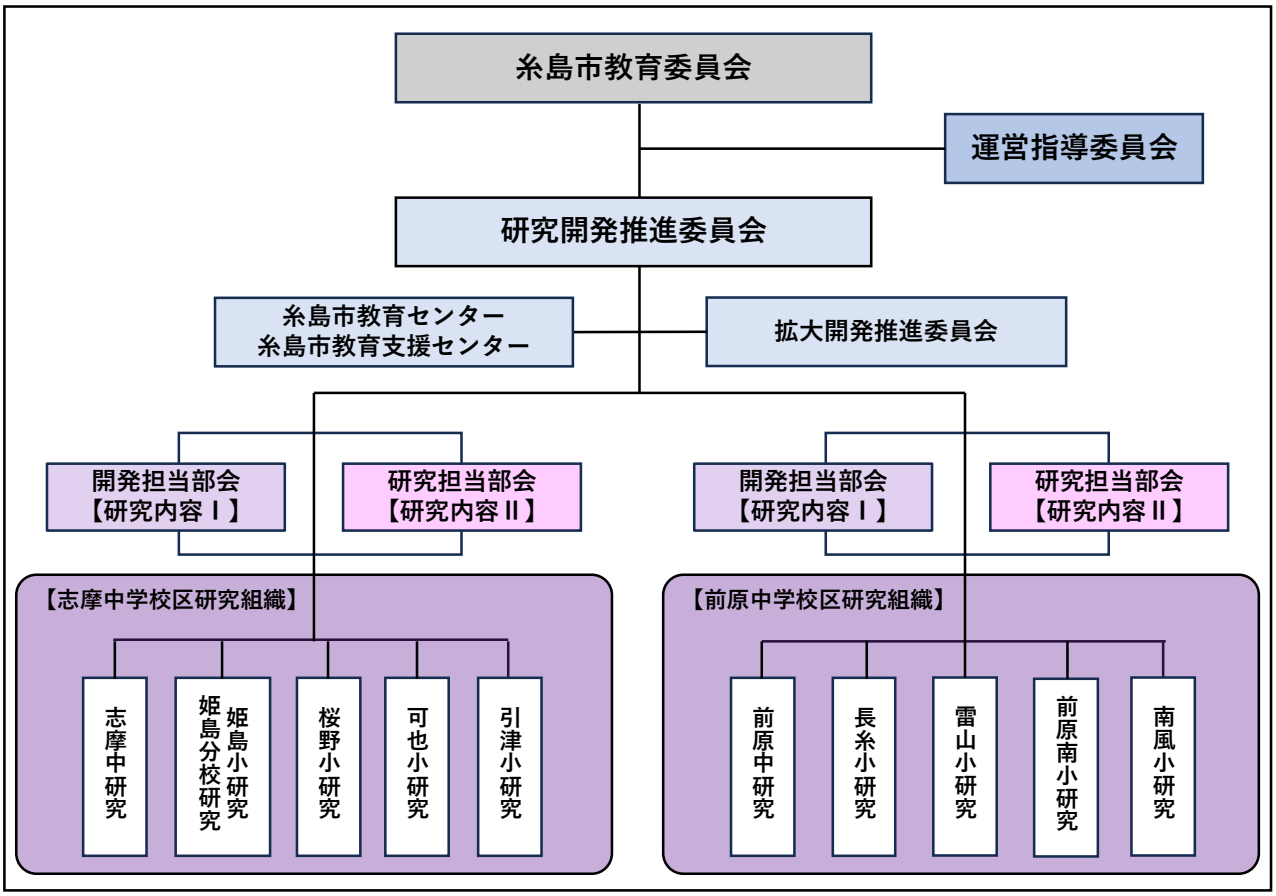
研究開発担当者及び各学校の校内研修担当者が、研究内容Ⅱについて組織的・計画的に校内研究を推進する。

・研究開発担当者（研究開発に係る加配教員）

市主催の委員会、部会等の協議等に参画するとともに、担当校区内小・中学校の連携・協働体制の構築と連絡調整を行う。

・拡大開発推進委員会（必要に応じて開催）

研究推進方針の大幅な変更や新たな研究内容等の周知徹底が必要な場合に、開発推進委員会に加え、開発担当部会代表、研究担当部会代表が参加する。



【資料６】糸島市研究開発運営組織図

（２）運営指導委員会

①組織

氏　　名	役職	所属等
田上　哲	委員長	九州大学人間環境学研究院 教育学部門 教授（教育学部長） 教育学部 （併任）人間環境学府 教育システム専攻（併任）
三宅　庸介	副委員長	株式会社ソコナラ 代表取締役
村川　雅弘 （R８年度）	委員	現甲南女子大学人間科学部総合子ども学科 教授 次年度：鳴門教育大学 名誉教授
吉村　隆之	委員	九州大学大学院人間環境学研究院 教授（公認心理師・臨床心理士） 九州大学附属総合臨床心理センター所長
岡　祐輔	委員	福岡大学 経済学部 教授
大津　理恵	委員	福岡県教育庁教育振興部義務教育課指導班 指導主事
扇　裕人	委員	福岡県教育庁福岡教育事務所教育指導室 指導主事
藤木　悠介 （R７年度）	委員	福岡県教育庁教育振興部義務教育課指導班 指導主事
後藤　太志 （R７年度）	委員	福岡県教育庁福岡教育事務所教育指導室 指導主事

②活動計画

６月	第１回運営指導委員会 ・研究開発２年次の研究構想 ・中間報告会に向けた校内研修、教育実践に関する助言 ・各学校の実践に対する評価
１１月	第２回運営指導委員会 ・中間報告会を終えて今後の方向性に関する助言 ・各学校の実践に対する評価
２月	第３回運営指導委員会 ・２年次の評価と次年度の方向性 ・各学校の実践に対する評価

探究的な学びの局面のパフォーマンスを例とした「志摩中学校区で育成を目指す児童生徒像（案）」

別紙１

小中を通じて育成すべきと考えている資質・能力

知	・メタ認知　・重要な概念への関心　・情報や技術の利用、管理、評価
徳	・他者の尊重　・倫理観と適応感　・責任ある意思決定
体	・自他の関係性の把握　・固定概念の克服　・批判的な内省

桜野小学校の教育目標『「やってみよう！」と主体的に考え、行動する児童の育成』

知	**「よく考え、学び合う力」** 主体的・探究的に学習に取り組み、自分に合った内容や方法で力を伸ばすことができる児童
徳	**「やさしく、支え合う力」** 協働的に取り組み、お互いのよさを認め、関わることができる児童
体	**「はげまし、高め合う力」** 新たなことや困難ことに挑戦し、粘り強く取り組み、自分の力を高めることができる児童

可也小学校の教育目標「自分に自信をもち、わかる！できる！喜びを実感する児童の育成」

知	**「かしこい子」** 学習の基礎・基本を身に付け、自分の学習プランを立て、課題解決の達成感を味わう児童
徳	**「やさしい子」** 自分に自信をもち、周囲に対して思いやりの心を発揮できる児童
体	**「つよい子」** 自分の健康と体力を考え、自分の責任を果たし、目標に向かって確実に前進する児童

引津小学校の教育目標「『自分の学び』と『つながる心』を深める子どもの育成」

知	**「学び合う子ども」** 粘り強く学習に取り組んだり自己の学習を調整したりする児童
徳	**「深め合う子ども」** 自分と仲間の良さを認め合い、関わり合う児童
体	**「育み合う子ども」** 困難なことにも挑戦し、やり遂げようとする児童

⇄

志摩中学校の教育目標
「郷土を愛し、知・徳・体の調和のとれた人間性豊かでたくましい実践力のある生徒の育成」

知	**「読む」課題把握（動機付け、方向付け）** 地域や社会にある過去及び現在の様々な知的財産（ひと・もの・こと）の特長や存在価値に気付き、時代の趨勢や地域や社会の将来像を見通しながら、今までにない新しい視座や視点から、その知的財産の新たな価値付けの方向性を見いだす生徒
徳	**「創る」課題追究（情報収集・考察・構想）** 地域や社会の知的財産（ひと・もの・こと）に対し、自分の言動が与える影響を鋭敏な感性で推し量りつつ、そのために必要な知識や技能を探りながら身に付け、自己の言動に責任と覚悟をもって、有意義かつチャレンジングな「はたらきかけ」をする生徒
体	**「磨く」課題解決（表現・整理、振り返り）** 地域や社会の様々な知的財産（ひと・もの・こと）とのコラボレーションを図ろうとする姿勢を持ち、置かれた状況要に応じて既存の価値を批判的に検証・再構築したり、多様な他者との対話や合意形成を図ったりしながら、地域や社会の新たな価値を創造する生徒

姫島小学校・姫島分校の教育目標「姫島を愛し、心豊かでたくましく、自ら実践する児童生徒の育成」

知	**「よく考え進んで表現する力」** 主体的に学習に取り組み、身に付けた見方・考え方を働かせながら、自分の考えを表現できる児童生徒
徳	**「人を大切にする力」** 互いのよさや個性を認め合い、励まし合い、助け合う児童生徒
体	**「挑戦し続ける力」** 心身の健康に関心を持ち、困難な状況でも粘り強く目標に向かい、失敗を恐れずに新たな課題にチャレンジする児童生徒

目指す児童生徒及び教職員を育む学びの基盤としての「心理的安全性が保障された集団・組織」